「今日の説教、聴き手のために」　2008/7/20 明治学院教会(122)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「神と富」　マタイ６：１９～２４

1、「天に宝を積みなさい」という小見出と共に、ルカの並行箇所(12:33-34)ガ記してあります。両福音書の元の資料は「イエスの語録資料（Ｑ）」です。この「資料（Ｑ）」をのこした人々（教会・教団）はイエスの言葉を大事にする社会層の人々でした。他人を踏み倒してでも金儲けのことしか考えていない金銭観の人間（富裕層のある人々）は、富を絶対化し、富ガ己の「神」になっている人達です。富のためには、人を人とも思わないので、人間の連帯は生まれません。また、逆に、その日の生活に事欠く貧しくされた層の人は、支え、助け合わなければ生きてゆけない人々、イエスガ「貧しい人々は幸いである」（ルカ6:30）といった人達です。「富ガ神カ」を思考する余裕はありません。この人達はイエスを信奉して、病気の治癒を求めた最下層の人達で「奇跡物語」などの伝承の担い手でした。とすると、富に対する人生の処しかたの良否ガ、言葉や思考として問題になる社会層は中間層の人々です。その人々によって「富と神」のテーマは伝承されました。

2、「言葉の文化」の担い手（Ｑ）は、自分達の生活に自己省察を加え、富の問題を、所有をめぐる思い悩みや富をどの様に用いるかという決断の問題として考えた人達です。富を絶対化出来ないために、悩み、迷う。このことは極めて人間的な事です。それを、富を人間的繋ガりを弱めるネガチヴ（消極的）な方向に考えないで、人間ガ連帯していこうとするポジティヴ（積極的）な方向に考えるカガ、ここのテキストの問題です。

3、19～21節。「富を天に積む」はルカの並行箇所12：33と比べると、ルカは「思い煩うな」の文脈に富を結び付け、ルカの神学の特徴を示しています。マタイは「禁止命令」（地上に富を積んではならない）を加え、19「積むな」,20,「積め」,21 「富は心だ」と三文節の構成を創り、ユダヤ教知恵文学伝承の名残をとどめています。イエスをユダヤ教ラビと同様普遍真理を説く知恵の教師像によって描くのは「Ｑ教団」の思考を反映しています。

4、22～23節。直接富に関係のない格言（ルカ11:34-36）を導入。「澄む（ハプルース）」は「物惜しみしない」。ひたむきさを目で表現する事で、次節の「決断」に繋げています。

5、24節。富を決断の問題として迫ります。富と神は、仕える事の裏腹です。富の絶対化は連帯的人間を否定します。連帯のために捧げられ、用いられる富と共に神はいまし給う事を、わずかでも託せられた「富」を前に思考し決断して行きたと思います。

6、阪神大地震の時の経験。富の相対化と献金の証し。